

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです  
短所は気にしないことだ。いまの君には必要ないものだから。

長所が自らの役割を果たすための武器だとすれば、短所は今世(?)の役割を果たすためには必要のない武器です。「今世でお前が生まれてきた役割を果たすには、その武器は不必要だから置いていきなさい。そう神様が判断したものが短所なんですか?」「神様がどうかは別だけど、そう考えればいいね」そんな会話を船井先生と交わしたことがありました。しかし、人間はどうしても他人の短所が気になります。とくに優秀な人間ほど、そのクセがあるようです。「確かに優秀な人間ほど、どうしてこいつはこんなこともできないんだ!?と考えると短所を直そうと指導してしまう」短所をどれだけ直そうとしても、その人間の成長にはつながらないようです。その人間の本来の役割を果たす道からはずれてしまうからでしょう。「短所を指摘しても直せる人間は、100人に1人もいない。短所を直そうとすると、自分の長所まで見失ってしまうんだ」短所是正法は、絶対に採用してはいけません。常に長所伸展法で事に当たりなさい。これは、繰り返し、そして強く、船井先生が社員に伝えていることでした。とはいえ、やはり短所に目がいきます。こうすればいいのにと、我が子に対しても、部下に対しても、自然に思ってしまう自分に、ヒヤリとするのは日常茶飯事です。「長所を見つけるクセは、毎日毎日訓練するんだよ。この店舗はここが素敵だ、この人間はここがいいなと意識して見る」人に好かれる素養は、間違いなく成功する性格の第一です。そして船井先生はものの見事に、長所発見の名人で、他人の欠点を指摘する言葉をついぞ、聞いたことはありませんでした。あるとき、どうしても顧問先との約束を守れない部下を先生のもとに連れていきました。優秀な男で、時間のルーズさえなくなれば、すぐにでもリーダーになれる、そう思っていました。「彼は優秀なんです、どうしても顧問先との約束を忘れることがあって。何か秘訣を教えてください」そんな私の申し出に先生はニコニコして言ったのです。「短所は気にしないことだよ。いまの君に必要なものだからね」私も啞然としましたが、隣に座るS君はもっと驚いたでしょう。小言の一つか二つはと思っていたはずです。「佐藤君に聞いているが、素晴らしいコンサルティング成績だそうだね。いつも助かる、助かると彼は言ってるよ」経営者にいつも手紙を書いていること、電話が抜群に上手なこと、とくに和菓子店のコンサルティング実績が抜群なこと……。「たいしたものだ。いま、いくつ?二七歳か!どンドン歳をとって早く大幹部になれよ!」社長室を辞そうとして、腰を浮かしたときに先生の笑顔がいつそう深まりました。そして、「力がつくまでは、できないことは受けなければいいんだよ。君は十分優秀なんだから。頑張りなさい」そう言うとき軽く右手をあげたのでした。七つほめて一つ指摘するくらいがよいね。気分がよくなれば、他人の指摘も聞く気になる。まるで魔術にかかったように、S君が変わったことは言うまでもありません。さて、船井先生もそうですが、素晴らしい成功者に共通している点があります。「不得手なことは、できる人に任せることだよ。何でもできる人間なんていないよ」何でもかんでも自分でやろうとする私に、ぽつりと先生が言った言葉です。不得手なこと、短所だと思えることを他人に任せられる人間が、成功を継続できるようです。自らをカリスマと信じ、すべてを自らの判断で押し進めようとする、その結末は悲劇に終わると、幾多の事例が教えています。難しいことですが、短所に目を向けない、短所を気にしない……。そのクセづけがとても大切だと実感します。

カッコ内を埋めてください

( ) は、絶対に採用してはいけません。常に ( ) で事に当

たりなさい。これは、繰り返し、そして強く、船井先生が社員に伝えていることでした。